哲學研究　第百十九號

朱子の禮論に關する一考察（二）

後藤俊瑞

既に述べた如く禮は天理と離れたものではない。而して禮に和と嚴との二性質があると考へるのも、朱子によれば實は禮の本質たる此の天理と關係せる概念である。禮は天理の具體現で、其の坐作進退器械等の外部的內容も悉く天理に合したものであるが故に、個人がそれを任意に取捨損益することは許されない。分毫も之を犯し越えることが許されないものである。一般人に在つては人欲氣禀の拘蔽を免れ得ないから、其性の本質たる理の發動も自然の儘ではなく多少偏せざるを得ぬ。從つて其動作の如きも決して禮と完全に合致するものでない。されば若し己の動作をして正しからしめんと欲する人々は、外的には禮を標準として己の動作を正して行かねばならぬ。此に於てか此等の人々は禮の拘束を感じ、且つ又、此禮は分毫も犯すことが出來ぬとの意識を持つ。禮に關する此拘束の感と不可能の意識とが禮の嚴肅性の意識である。禮に對して此意識を持つ人々にとつては、禮は實に嚴肅な

るものである。然るにかく嚴肅なるものとして意識せらるゝ禮は、己に述べた如く自然の理に從つて之を品節したものであるから、一節として人に强うるものは無い筈である。我性の理の自然の發動の儘に從へば吾等の行動は自ら禮に合致し得る。されば聖人に在つては何等努力することなく自然に能く禮を實行し得る。聖人に在つては、禮を實行する際には禮の拘束と不可能との意識を生じない。卽ち聖人には禮の嚴肅性の意識なくして能く禮を實現し得る。寧ろ禮は從容迫らぬ和なるものと意識せられるのである。かゝる人にとつては禮は實に和なるものである。されば禮本來は嚴なるものではなくて實に和なるものであるといへる（語類卷二十二自六枚至八枚）

かく禮の嚴肅性は、氣稟人欲の拘蔽を受ける結果性の理の發動が妨げられて不完全である人々に於てのみ意識せられるので、性の理が自然に完全に發動する聖人に在つては禮は反つて和なるものであるから、禮を實行するに當つて、其の嚴肅性を感ずること彌々深き人は氣稟人欲の拘蔽の彌々大なる人である。之に反し、此の意識の微かなる人ほど、換言すれば禮の和を體驗すること彌々深き人ほど、其の拘蔽を受くること少なき人である。而して其の究極に達したのが卽ち聖人である。故に禮の嚴肅性をより少なく感じ、從つて禮の和をより深く體驗せん爲めには、氣稟人欲の

拘蔽を少なくして我性の理の發動を自由ならしめればよい。それが爲めには朱子に在つては最も根本的な究理の功夫から進まねばならぬ。禮の理が明かとなることによつて、やがて禮の和を體驗することが出來るのである。彼は此の事を「公門を入りて鞠躬、位に在つて踧踖、父坐して子は立つ。苟も臣を以て君に事へ、子を以て父に事ふる、當に此く爲すべきを知らずんば、終に是れが和を解せず」(語類卷二十二。七枚)と述べて居るのである。

然らばかゝる諸種の禮は如何なる過程を取つて生起したものであらうか。古來禮の起源に關して異說がある。全然聖人の創作したものと爲すのが荀子等の主張である。彼は曰ふ「禮は何より起れるや。曰く、生れて欲有り、欲して得ざれば則ち求むること無き能はず。求めて度量分界なくんば則ち爭はざる能はず。爭へば則ち亂れ、亂るれば則ち窮す。先王其の亂を惡む。故に禮義を制して以て之を分ち、以て人の欲を養ひ、人の求を給し、欲をして必ず物を窮めず、物をして必ず欲に屈せず、兩者相持して長ぜしむ。是れ禮の起る所なり」(荀子禮論)と。彼によれば、人は生れながらにして肉體的欲望がある。欲望は物質によつて滿足せしめられる。此欲望を自由に放任すれば求めて飽く時がない。若し萬人が求めて飽かないならば、卽ち有限な

る物質を凡ての人々が無限に求めるならば、各個人の間には爭鬪を免れない。爭鬪すれば亂れ、亂れると窮するに至る。先王は爭鬪を惡んで之を防がんと欲した。之を防ぐには其の根源たる欲望の無限の滿足を制限しなければならぬ。各個人の欲求を制限して萬人が適當に之を滿し得る樣に先王は禮義を制した、といふのである。故に、荀子は、聖人が禮を制定して後始めて人は爭鬪を止める樣になつた。禮の制定せられない以前の人々に在つては、唯鬪爭のみあつて何等の共同生活が行はれなかつた。自己の力によつて自己の欲望を抑壓し、以て他人の幸福を增進せしめる樣な社會的風習は全く無かつた。聖人起つて自己の意の儘に禮を創定して始めて共同生活が成立するに至つた、と考へた。我國の徂徠の如きも亦禮を聖人の創造したものと爲すのである(辨道)。

然るに朱子は禮の起源に關して荀子と異なつた見解を持つてゐた。語類卷八十五の葉賀孫の錄に「儀禮は是れ古人豫め一書を作りて此の如くならず。初間只義を以て起り、漸々相襲行し得て好く、只管巧に、情文極めて細密極めて周經なる處に至る。聖人此の意志の好きを見、故に錄して書を成す」とある。されば朱子によれば、今日殘れる禮のテキストは聖人が創作したものであるけれども、其の具體的事實たる禮そ

のものまでも創造したのではない。升降揖讓等の外面的動作や、禮に用ふる衣服器械類の如き、其の初めは義を以て人情の自然に從ふ所から發生したものである。孟子滕文公上篇に、昔親の屍を放棄し、他日其子之を過ぐるに悲慘いふべからず。其子泚然として汗出で、遂に其屍を掩覆した。是れ人情の自然であつて決して人の爲めに爲すのでは無い、との意味の語があるが、朱子は之に注して「此葬埋之禮所由起也」と述べて居る。親の屍を見て遂に之を掩覆した。是れ人情の自然に從つたのである。此の掩覆の事實が歲月の推移と共に相襲行せられて風習となつた。此の風習が只管巧となり、時代と共に情文極めて細察に、極めて周經なる所に達した。此に於て聖人は其の風習の善きを見て遂に之を錄して書と爲したのである。其他の諸禮亦皆然りである。禮のテキスト主ずる以前、聖人出づる以前、已に風習として其の實際は行はれてゐたものであるといふのである。

然らば、テキストに載れる禮は古の風習そのまゝであるか。彼は決して左樣には考へない。風習卽古禮ではない。聖人は此風習に加工した。既に行はれてゐた風習を素材として之を一層純粹化し合理化したのが禮である。語類卷九十一に「韓は皮を以て之を爲る。今の水檐の如く相似たり。蓋し古今未だ衣服有らざる時、且ら

く鳥獸の皮を取り來つて前面後面を遮れり。後世聖人服を制して此者を去らざるは古を忘れざるを示すなり」(六枚)と見える如く、服制でも聖人が全然新たに創作したものではなく、風習に從つて制したものであるが、然し風習其儘ではないと考へたことは明かである。從つて、若し今日聖人が出て禮を制定するにしても又同じく今日の風習に從つて制定するに相違ないとの彼の意見が語類に屢々見えて居るのである(卷八十九、胡泳錄等)。荀子徂徠等が禮の凡てを聖人の創造と爲すのとは甚だ異なり、反つて眞を得た思想と思はれる。

果して然らば、如何なる主義標準によつて聖人は風習に加工したのであるか。從つて又加工すべきものと爲すのであるか。朱子の說く所を觀るに、

一、人情に基き、之を盡さしむる樣に禮の外面的形式を定めること。

禮記問喪篇に曰く、死して直に斂せず、三日の後に斂するは、死者の再び甦らんことを欲するからである。既に死んだ以上其の甦らざることは三日を俟たずして明かである。それにも係らず尙且つ三日を俟つて然る後始めて斂するのが禮である。聖人が、蘇生を希うて止まぬ人情を盡さしめんと欲せしや知るべしと。禮の坐作進退のみならず、其の衣服器械に至るまでも亦人情を盡さしめる樣に加工した。一例

を喪服に取れば、喪に當つては哀戚の情が深刻である。故に其服も亦此哀情を盡さしめる樣に制せられた。儀禮喪服の鄭注に「前に衰有り、後に負板有り、左右に辟領有り、孝子は哀戚在らざる所無し」とあるは之を知るに足る。而して此等の思想は朱子の承くる所となつた。朱子は謂ふ「古の喪禮は極めて繁縟である。親の死に際しては子の哀は極めて痛切深甚である。かゝる哀苦荒迷の際に方つて、どうして斯くの如き繁縟な古禮を一々行ふ事が出來よう。然るに古に在つては此の繁縟な禮も能く實行せられ、然も能く人情を盡し得たのは、禮を助けて之を導き行はしめる人が有つたからである。然るに今日は古の如く禮を傍から助け行はしめる者も居らぬ。故に若し强ひて一々自ら之を實行せんとすれば其の方にのみ心を奪はれて反つて哀戚の情は消失するに相違ない。されば もつと簡單なものに改めて其哀戚の情を盡さしめるものとしなくてはならぬ」（語類卷八十九備錄）と。此に由つて觀れば、朱子が禮は人情を盡さしめる樣に改め制定しなければならぬと考へたことは明かである。

然し、人情を盡さしめると言つても、自然に發生する情をそのまゝ悉く滿足せしめるといふ意味で無いことは勿論である。情を合理的に盡さしめるものでなくてはならぬ。換言すれば、情の質と量とを合理的に盡さしめる樣に加工せねばならぬ。

情の足らざるは之を達せしめ、過ぐるは之を節して、義に合する樣に盡さしめる底に禮を制定しなければならぬ。皮錫瑞は古禮が此心得を以て制定せられたることを論じて「聖人禮を制するや、情義兼ね盡す。專ら情を主とすれば則ち親しみて尊ばず。必ず將に褻慢に流れんとす。專ら義を主とすれば則ち尊びて親しまず。必ず疏濶に失するに至る。惟古禮は能く兼ね盡して偏重せず」(三禮通論)といひ、或は禮記檀弓下の「禮は情を微ぐ者有り。故を以て物に興る者有り。直情にして徑行する者有り。戎狄の道なり。禮の道は則ち然らず」(子游語)の如き、何れも禮は情を悉く滿足せしめるのではなく、實に宜しきに合して盡さしめる樣に制定せられて居るものであることを述べたものである。そして此思想が又朱子の思想であることは今迄述べて來た所によつて自ら明かであると思ふ。

二、禮を受くる者の幸福を顧慮して制すること。

語類卷八十九に「禮、壙中生體の屬を用ふるは、之を久しうして必ず潰爛し、却つて蟲蟻を引く。亡者の爲めに久遠を慮る所以に非ず。古人壙中物を置くこと甚だ多し。某を以て之を觀るに、禮文の意太だ備はれば則ち防患の意反つて足らず。之を要するに只當に久遠を慮り、土をして膚に親づかしむることなかるべきのみ」(十三枚)と見

えて居る。死者に對しても尙其久遠の幸福を希うて止まざるは人情の美はしい所である。壙中に生體の屬を用ひて其が爲めに反つて蟲蟻を引き、屍をして早く朽敗せしめるのは死者の幸福を希ふ者の能く忍びざる所である。唯禮は死者久遠の幸福を實現せしめる爲、生體の屬を用ひず、屍をして直接土に接せしめざる樣にしなければならぬ。死者の幸福を破壞するが如き禮には從ふべきでない、との論である。之を一般的に言へば、禮は禮を受くる者の永久の幸福を實現する樣に制すべきであるといふのである。但、幸福を希ふ人情を盡さしめる點からいへば此も亦一に屬せしめることが出來る。

三、時代に適する樣に制定すること。

禮記禮器篇に「禮は時を大と爲す。……堯、舜に授け、舜、禹に授け、湯、桀を放ち、武王、紂を伐つは時なり。云々」とある。之を注して鄭玄は「命を受け制度を改むるを言ふ」といひ、陳澔は「堯舜湯武の事同じからざる者は各其の時に隨ふのみ。聖王命を受け天下を得るや、必す一代の禮制を定む。或は因り、或は革め、各々時の宜しきに隨ふ。故に時を大と爲すと云ふなり。云々」といつて居る。禮は時の宜しきに隨つて制するを必要と爲すのが經文の意であることは、兩注によつて明かであるが、朱子も亦此

意を承けて曰う「禮は時を大と爲す。……古禮此くの如く零碎繁冗、今豈に行ふ可けん。亦時に隨つて裁損するを得るのみ」(語類卷八四。二枚)と。

四、本始を忘れず、之に保存する樣に制すること。

禮記に「禮は其本を忘れず云々」(檀弓上)とあり、又「禮なる者は本に反り古を修め其始めを忘れざるものなり」(禮器)と見えて居る。此に所謂る本とは本始の謂である。本始を忘れずとは其の初めの風習の質なる時に用ひた品物を、後代文なる時の禮中に保存し、以て古を忘れざるの謂である。後の禮に尙ほ玄酒を用ひ、黍稷を食ひ、大羹を用ふるが如き卽ち是である。此の思想は又朱子の承くる所となつて彼も亦古の聖人禮を制するや其本始を忘れず之を禮中に保存したと考へた。前に取用した語類卷九十一の「韠は皮を以て之を爲る云々」は卽ち之を示すものである。

五、往來あらしめる樣に制すること。

禮記曲禮に「禮は往來を尙ぶ、往いて來らざるは禮に非ざるなり。來つて往かざるも亦禮に非ざるなり」とある。往來を尙ぶのは禮の一特質である。聖人は之を尙んで往來あらしめる樣に禮を制定したのである。獻じて必ず酢し、酢して必ず酬するが如きは燕禮に於ける往來である。婦、舅姑に饋すれば、舅姑、婦を饗するが如きは昏

禮に見れたる往來の一例である。朱子も禮の往來を述べて曰く「禮也者報也」（儀禮經傳通解禮樂記）と。以て彼が禮の制定には往來を顧慮したと考へたことは推知することが出來る。

六、處の宜しきに從つて制すること。

禮記王制に、廣谷大川は各其形象を異にし、其の間に生ずる民も亦此等自然の影響を受けて俗を異にして居る。夫々其の場所に宜しき風俗があり、器械衣服五味があ る。聖人は其の禮儀を修むるも其俗を易へずして之に從ひ、其の政を齊うするも其の宜しきを易へずして之に從ふ。約言すれば、聖人は各地の風俗習慣を重んじ、之に從つて其の禮儀を修め、刑禁を定めるといふ意味のことが述べられて居る。蓋し、聖人禮を制するや、凡ての場所に通ずる樣な禮を制するのではない。各地の宜しきに從つて制するのである。朱子曰く「夫れ三王禮を制す、……皆風氣の宜しきに合す」（文集卷二十四答張欽夫書）と。是れ其の思想である。

上述の如き諸條件を顧慮して制定せられた古禮は、行爲の規範として當時の人々の行爲を規定し、人々は之に從ふことを正當と思惟したのであるが、此禮が規範として有する效果は決して永久に存續するものではない。時代の推移と共に變化改良

して行かねば其の效果は存續出來ぬ。古禮は古の儘では後世に通用し得ぬ事が屢々ある。上述の禮制定の第三標準の必要なる所以である。聖人古禮を制するや其時の宜しきに從つた。卽ち其當時の社會的事情を顧慮して宜しきに合する樣制定した。然るに事情は時と共に變化する。嚴密なる意味に於て同一なる事情は存し得ない。各時代は其の社會的事情を異にして居る。故に一時代の事情に宜しき禮が、次の時代に適しなくなるのは當然である。論語に「子曰はく、麻冕は禮なり。今や純は儉なり。吾衆に從はん」(子罕)とある。卽ち麻冕は古禮であるが、孔子の當時に至つては純を用ふるのが一般の風習となつてゐた。孔子は麻冕の古禮を捨てゝ今の純に從はんといはれたのである。麻冕の古禮が孔子の當時已に行はれず、然も不適當となつてゐたことは明かである。但、時代は移り事情は變化しても、萬代の禮が今に宜しきものもある。孔子が其の直ぐ次に、下に拜するは禮であるが、今や上に持する。自分は一般風習と過つても古禮に從ひ度い、といつて居られるので之を知ることが出來る。孔子は、それが古禮であらうと其當時の風習であらうと、一にそれが其當時の宜しきに合して義に害なき方に從はうとせられたのである。朱子も亦「古禮は繁縟、後人禮に於て日に益々疎路、然れども今に居つて古禮を行はんと欲するも亦

恐らくは情文相稱はず云々」(語類卷八十四。一枚)とか「三代の際禮經備はれり。然れども其の今に存するもの、宮廬器服の制、出入起居の節皆已に世に宜しからず。云々」(家禮序)と曰つて、古禮が朱子の當時適しなくなつたことを述べて居る。

されば古禮は時代によつて變化改良を加へねばならぬ。又、事實改良せられて來た。例へば、老を養ふに、有虞氏は燕禮を以てし、夏后氏に饗禮を以てし、殷人は食禮を以てし、周人になつては修めて之を兼ね用ふるに至つた(禮記王制參照)。或は又、唐以前に於ては父在せば母の爲めに期、婦は舅姑の爲めに期であつたが、唐以後に及んでは何れも三年の喪に服するに至つた(皮錫瑞三禮通論參照)等は卽ち是である。朱子も亦語類の到る處に(卷八十四、八十七等)古禮は繁縟に過ぎて居るから今日の世には用ふることが出來ない、宜しく今の時代に適する簡易な禮を制すべきであるとの意見を述べて古禮の改良すべきことを認めて居る。

禮はかく時代の推移と共に變化改良せねばならぬとしても、朱子によれば禮そのものの凡てを變化せしめるといふのではない。禮の變化改良する部分は單に外面的形式のみに止まる。禮に內在する當然の理に至つては、千萬世と雖も消滅變化するものではない。故に彼は、論語爲政篇の十世知るべきやとの子張の問に對ふる孔

子の語に注して、禮の大體たる三綱五常は永久不變である。只夏殷周が損益したものは其の制度文爲に過ぎぬ云々と說いて居る。語類卷二十四には、因る所の禮は是れ天の做す底、故に時に隨つて更變す」(二十八枚)とあり、又、禮の「綱常は千萬年磨滅し得ず。只是れ盛衰消長の勢自ら已むべからず。盛んにして又衰へ、衰へて又盛んに、其勢此くの如し。云々」(三十枚)と曰つて居る。所謂る天理に盛衰ありとは、人の之を實行することの多少を意味するのみ。天理そのものに盛衰ありといふのではない。禮は天理の節文である。天理は恆久不變である。其の變化するものは節文である。節文たる外面的形式に變化改良を與へることによつて、禮は行爲の規範としての價値を持續することが出來る。

古禮は朱子の頃に至つては實に複雜極まるもの、繁密極まるものと感せらるゝ樣になつたことは、語類の諸所に反復して述べて居る。然しかゝる古禮も古に在つては能く實行せられてゐたもので、人々は其の禮の中に生長して見聞は悉く禮であつた。從つて人々は自ら之に馴れて何等の困難もなく實行し得た。然るに朱子の當時に在つては「此の如く繁密、必ず行ふべからず」(語類卷八十四。二枚)といふ狀態となつた。されば此の古禮を改めて「必ず簡易疏通之を見て知り易く之を推して行ひ易からし

むべき」である（同上）。一例を言へば「昏禮に婦嫁して三月の後廟見する古禮を改めて、第二に舅姑に見え、第三日に廟見して宜しい。今日は三月の久しきを俟つことが出來ぬ。」或は「冠昏の古禮を實行する場合には、其の言辭（三加之辭、出門之戒の類）は曉り易き今の俗語に改めて可」（語類卷八十九淳及時舉錄）と言つて居る。然らば繁縟なる古禮が古に實行せられて今に實行せられないのは何故か。其の主原因は「蓋し人情簡便に趨くが故」（語類等八十四。三枚）である。彼によれば古は人情極めて密であつた。從つて此の人情に基き盡さしめる禮も亦極めて繁縟であつた。古に在つては情と禮の文とは相稱つてゐた。繁縟なる古禮のよく行はれた所以である。然るに人情は時代と共に次第に簡便に趨くに至つた。人情既に簡便に趨けば、禮亦簡便ならざれば情文は相稱はぬ。古禮が今に行はれ難い所以であると考へた。彼が家禮の編纂も此かる精神から起つたものである。

聖人は兎に角、氣稟人欲の拘蔽を受くる者に在つては、必ず禮によつて自己を規定して始めて情の宜しきを盡し、外的行爲も道德的に正しきを得る。初めは禮に隨つて行動するが、常に之に從つて居れば皮錫瑞も言へる樣に「自然に嚣陵放肆の氣は覺えざるに潛消し」以て習慣は形成せられ、遂には禮の束縛の意識なく、能く安じて禮に

合した行爲を爲し得るに至る。此境地は儒敎の理想と爲す所である。吾等をして此の理想境に到達せしめん爲め聖人は禮を制した。そして禮の道德的價値も實に此に存すると朱子は考へたのである。（終り）